

平成25年度「北海道医療安全文化ベストプラクティス～院内の取組から～」

1. 医療機関等名 医療法人社団高翔会 北星脳神経・心血管内科病院

2. 取組名 転倒・転落防止対策

3. 取り組むべき課題や背景 当院では、アクシデント報告を平成17年から義務付け、集計を行なっている。転倒・転落事故は、当院の医療事故の3割を占めており、転倒・転落事故を防止することで、事故総数を減少することも期待できる。また、骨折等を伴う重篤な事故に繋がる危険性も含むため、ハイリスク患者を予見し、転倒・転落を未然に防止することが急務となっていた。

平成18年10月より、転倒・転落防止マニュアルを整備・運用することで、ある程度の成果を得たので、その経過を紹介する。

4. 医療安全文化の醸成に資する取組

アクシデント報告書から転倒・転落事故の分析を行い、事故を起こしやすい患者傾向を把握し、アセスメントスコア等へ反映させた。

転倒・転落防止マニュアルとして、「転倒・転落防止のフローチャート」「転倒・転落アセスメントスコアシート」「転倒・転落防止標準看護計画」「患者・家族用オリエンテーションシート」「危険度識別リストバンド」を整備した。

特に工夫した点は、危険度識別用にカラーリストバンドを使用した。アセスメントスコアから評価された危険度（4段階）別に色を設定して、患者の左腕に着用してもらうことで、一目で転倒・転落を起し易い方か否かを識別することができるツールである。

リストバンドの識別

- ◆黒マジックで記入
- ◆原則として左手首に着用

危険度H【紫】
ハイリスク患者
123456
ホクセイ タロウ 2F 同

危険度II【赤】
転倒・転落をよく起こす

危険度I【黄】
転倒・転落を起こしやすい

危険度0【緑】
転倒・転落の危険性がある

北星脳神経・心血管内科病院 医療安全管理委員会

転倒・転落アセスメントスコアシート

詳細スコアの合計 (63点満点)
 0以下 → 危険度0 転倒・転落の危険性が低い
 10～19 → 危険度I 転倒・転落を起こしやすい
 20～29 → 危険度II 転倒・転落をよく起こす
 30～39 → 危険度III 転倒・転落をよく起こす
 40～49 → 危険度IV ハイリスク患者

分類	特徴 (危険因子)	スコア	評価項目
A: 寝たきりの状態	<input type="checkbox"/> 自力で寝起きを行う出来ない	NA	✓
B: 寝転	<input type="checkbox"/> 4リ歳以上、7リ歳以下 <input type="checkbox"/> 8リ歳以上	3	
C: 身体群	<input type="checkbox"/> 病状に転倒したことがある <input type="checkbox"/> 失神・力尽きた・脱力昏倒 <input type="checkbox"/> 過去に転倒したことがある <input type="checkbox"/> 入院時に転倒・転落	8	
D: 身体的機能障害	<input type="checkbox"/> 視力の障害 <input type="checkbox"/> 聴力の障害 <input type="checkbox"/> 平衡障害 <input type="checkbox"/> 歩行時、転倒・転落の既往、歩行不安定 <input type="checkbox"/> 歩行時、転倒・転落の既往、歩行不安定 <input type="checkbox"/> 歩行時、転倒・転落の既往、歩行不安定	3	
E: 精神的機能障害	<input type="checkbox"/> 意識障害 <input type="checkbox"/> 認知機能障害 <input type="checkbox"/> せん妄 <input type="checkbox"/> せん妄 <input type="checkbox"/> せん妄 <input type="checkbox"/> せん妄	4	
F: 活動状況	<input type="checkbox"/> 歩行時、転倒・転落の既往、歩行不安定 <input type="checkbox"/> 歩行時、転倒・転落の既往、歩行不安定 <input type="checkbox"/> 歩行時、転倒・転落の既往、歩行不安定	4	

5. 取組に対する評価

運用開始翌年から転倒・転落事故発生数は減少し、事故総数も減少させることができた。平成22年には、再び増加傾向となったが、職員からアセスメントと患者印象のズレを指摘され、アセスメントスコアを見直し、翌年以降減少させることができた。リストバンドによる職員への注意喚起が奏功したが、防止策の検討やアセスメント、患者・家族へのオリエンテーションなど総合的な活動が成果に繋がったと考える。転倒・転落は、ゼロすることは難しいが、起因する骨折事故ゼロを目標に今後も取り組みたい。

